

2019 年度理工学研究科・工学研究科
「教育・研究等改善アンケート調査」

教育・研究等改善アンケート調査の結果について

1) 教育・研究等改善アンケート調査の目的

- ・理工学研究科が実施する「教育・研究等改善アンケート」は、学部学生向けの授業評価とは視点を変え、研究指導等についての学生満足度評価の色彩を強めた設問により、研究指導体制や研究教育環境の改善に資する項目にしている。協力いただいた大学院生には感謝したい。教育・研究等の改善を高めるための自己点検活動・FD活動の一環としてここに公表する。

2) 調査方法、調査実施時期

- ・アンケート調査は、回収率を高めるために、教員による配票・回収により実施した。
 - ・配票・回収期間は以下の通り。
 - ・調査回収時期は 2019/11/22～2020/1/10 で実施した。
 - ・博士前期課程については在籍者 122 名（2019/10/1 時点）のうち、108 名（回収率 89.3%、昨年度 87.3%）の回答を得た。
 - ・博士後期課程については在籍者 9 名（2019/10/1 時点）に対して、回答者が 5 名（回収率 75%、昨年度 75%）であった。
- すべての項目について高い評価を得ているが、個人が特定される可能性を配慮し、詳細の公表は行わない。

4) コメントおよび対応

①大学院進学情報提供

- ・博士前期課程への進学理由の第 1 は「研究内容への関心」、第 2 は「担当教員におそわりたい」である。昨年の第 2 は「就職に役立つ」で、年度によって第 2 と第 3 が入れ替わる傾向にある。
 - ・「大学院進学を考えるのにどのような情報が一番役立ったか」との問いで、「研究室教員の紹介」と回答している者が一番多く、博士前期課程 49 名、博士後期課程 4 名であった。教員の影響が大きいことが分かる。
 - ・博士後期課程への進学理由の回答は、「研究内容に対する関心」「担当教員とのかかわり」の順となっている。
 - ・大学院進学決定時期は、4 年次が一番多く、続いて 3 年次で例年と比べて変化はない。今後も研究科・専攻別進学説明会に加えて、各学科の進級ガイダンス、教員から個別の大学院進学説明会を継続して行く。
 - ・学部生に大学院の教育研究の魅力を伝えるイベントとして、毎年、川越フォーラムを開催している。学部生に積極的に参加を促すような取り組み内容にしており、父兄にも参加案内を送付した。2019 年度の参加者数は 346 名で、昨年度と比べて 50 名ほど増えた。参加者アンケートを実施し、全体の 67%がプログラム内容に満足しているとの回答があり、父兄からは大学院に進学させたいとの意見も多かった。
- ・2015 年度から学部と大学院の連携を強化する目的で導入した大学院開講科目履修制度（先行

履修)では、2019年度は49名(107科目)で、前年に比べ履修者が約2倍に増えた。

②研究指導に関する評価

- ・博士前期課程の研究指導に対する評価では、「たいへん意欲的だった」と回答した者が79名おり、知的満足度を得られたとの高い評価である。また、「何を一番身につけることが出来たか」との問いでは、47名が「プレゼンテーション能力」、「専門的知識」、「情報収集能力」と回答している。
- ・博士後期課程の研究指導については、論文等の作成能力について評価が高かった。

③授業科目に関する評価

- ・授業科目に対する評価は、博士前期課程の51名が知的満足度を得ることができたいと回答している。講義の進捗は「適切」との評価が多いが、少数ではあるが早いとの指摘もある。少人数教育であるため、履修生の状況を確認しながら講義を進めていく必要がある。開講科目数については、「十分」又は「足りている」との回答が多い反面、「少ない」「増やして欲しい」という要望が9名あった。

④研究室等の施設環境

- ・研究室・実験室の機器やPCの充実について、「充実している」「まあ充実している」が85名、「どちらかといえば不足している」「不足している」と回答したものが12名であった。指導教員が研究室ごとに事情を把握し、適切に対応できるように努力していきたい。

⑤研究発表活動支援

- ・博士前期課程で74名(昨年度67名)、博士後期課程では1名が学会発表を行っている。そのうち博士前期課程53名(昨年度47名)は複数回の学会発表を行っている。論文採録数は、博士前期課程では18名(昨年度22名)、博士後期課程では2名が「実績あり」としている。受賞歴も博士前期課程で10名(昨年度6名)ある。研究発表活動は活発に行われている。
- ・学会発表等の支援については、研究発表奨励金制度の充実した環境により、学会発表経験者のほとんどが、おおむね良い経験になったと回答している。この制度の利用者の約半数が、自己負担なしで発表できている。その一方、交通費・宿泊費の2割以上を自己負担したと指摘する学生が、回答者の約2割(博士前期課程22/108)を占めている。
- ・博士前期課程で29名(昨年度40名)、博士後期課程で4名(昨年度6名)が学会発表をおこなっていないと回答している。昨年度と比べて減ってはいるが、改善に向けて専攻長会議で協議を行う予定である。
- ・研究発表を行うにあたり、「研究が思うように進まない」と回答した学生が博士前期課程で20名(昨年度19名)いた。昨年度とほぼ同数であるが、指導教員や先輩・後輩との日常のコミュニケーションの中で研究推進に努力してほしい。また、英語の質疑ができない、英語の論文が書けない、との回答者については、サイエンス・イングリッシュ特論の履修や研究科主催の英語ワークショップ、キャンパス英会話に参加してもらうことで、各自が改善に努めて欲しい。

⑥在職やアルバイトについて

在職やアルバイト日数が、週に4日が4名、5日以上と回答したものが3名いた。社会人入学の院生は博士前期課程で0名であるが、勤務時間もフルタイムが19名となっている。学費や生活費の捻出に必要な対応かどうか確認できないが、研究活動に支障がない状況かどうか、詳細を確認する必要がある。大学院の教育研究と職場・仕事の両立が困難と回答した博士前期課

程の学生数が2名おり、上記と合わせてフォローアップが必要と思われる。

⑦TAについて

今年度、博士前期課程の院生で61名がTAを担当している実態がある。大学院生数とTAを必要とする授業科目数にアンバランスがあり、結果として、13名がTA担当について負担を感じていると回答している。TA担当については、依頼する教員と大学院生側の十分な調整が必要である。教育補助を担当することは研究者・教育者としての素養を養うことにも役立つため、前向きに取り組む姿勢を期待している。

⑧総合評価

全体としては、満足している（とても満足、満足、まあ満足の合計）とする評価が93名（博士前期・博士後期課程89.4%）であるが、不満（不満、やや不満、あまり満足していない、の合計）が2名（昨年度5名）である。不満の評価は低いが、個別の評価内容を踏まえて、改善に努めていく。

以上

2020年3月1日

理工学研究科長 吉田善一